

# 「科学者の社会的責任を考える」授業を作る

ー水俣におけるフィールドワークの実践ー  
(5年計画の5年次)

筑波大学附属駒場中・高等学校 社会科

大野 新・小澤富士男・篠塚 明彦  
山田 耕太・宮崎 大輔・宮崎 章  
吉田 俊弘

# 「科学者の社会的責任を考える」授業を作る

—水俣におけるフィールドワークの実践—

(5年計画の5年次)

筑波大学附属駒場中・高等学校 社会科

大野 新・小澤富士男・篠塚 明彦  
山田 耕太・宮崎 大輔・宮崎 章  
吉田 俊弘

## 要約

5年前から始まった第二次スーパーサイエンスハイスクール（SSH）の研究テーマとして、社会科では第一次に継続する「科学者の社会的責任を考える」を掲げた。また、プロジェクト研究においても『科学者の社会的責任を考える』授業づくりを掲げた。2008・2009年度は広島で実習を行い、原爆の学習を通して科学者の社会的責任を考えた。昨年からは新たに水俣で実習を始めた。本報告は、昨年に引き続いて行われた今年の水俣実習の記録である。

キーワード：フィールドワーク 科学者の社会的責任 水俣 水俣病 社会科学習 ゼミナール

## 1 はじめに

昨年度の「科学者の社会的責任」を考える水俣実習は、こちらの期待通り、生徒にとって大きな経験となった。今年も昨年に続いて、水俣で実習することを企画していく中で、留意したのは、準備段階での学習の進め方や事後のまとめ方をさらに工夫することであった。昨年度は幸い、「水俣・明治大学展」が開催されたため、生徒の体験を伝える場が確保できたが、今年はないため、代わりに校内での機会を利用することとした（後述）。本報告では、昨年度との相違点に焦点を当てながら、今年度の実習の報告と今後に向ける課題について述べる。

## 2 高2ゼミナール

「水俣から日本を考える」（大野 新）

### 2.1 実習までのゼミ実施概要

本校の高校2年生を対象としたゼミナールは、土曜日を使い、6月以降年間7回設定されており、1回について3～4時間を使える。今年度の選択者は7名だった。

昨年も報告したように、水俣での実習を考えた時、まず中学1年時の学習の内容をどのくらいベースにできるかを考えた。しかし、実際に生徒から話をきくと、

何らかの関心をもって本講座の選択をしたが、中学校の時学習した具体的な知識はあまり残っていなかった。したがって、今年も水俣に関する学習から再びはじめることにした。

以下、全10回（臨時もふくむ）授業の実習までの内容について述べる

### 第1回：ガイダンス・水俣に関する総合的学習

#### (1) 〈6月11日〉

本ゼミナールの概要を説明し、各受講者からの講座選択の動機を聞いた。

水俣病に関する学習としては、4冊のテキストを準備した。①『水俣病小史』 高峰武編 熊本日日新聞社 ②『証言水俣病』 栗原彬 岩波新書 ③スーパーサイエンスハイスクール 総合講座講演記録集 2006年3月 筑波大附属駒場高校 ④昨年度の実習報告書である。①は熊本学園大学の水俣学ブックレットの一冊である。水俣病の歴史がまとめられている。編者の高峰氏には実習最終日にインタビューをすることができた。②は本校で行っているSSH（スーパーサイエンスハイスクール）事業の一環として実施した講演会にもお呼びした栗原彬氏の著作である。具体的に患者さんの証言が記録されておりよいテキストとなった。加えて、最近の水俣に関する新聞記事を配布した。中でも原田正純先生の水俣病の経験を3.11東日本

Discussing the social responsibility of the scientists in the classroom what was Minamata, and how should we teach it?

大震災の対応にどのように活かすかについてのロングインタビュー（朝日新聞 5月25日）が非常に参考になった。

続いて、今年のスケジュールの概要を示した。昨年は初めてのことであったため、スケジュールを固めるのに時間がかかったが、今年は昨年の経験をふまえて、おおまかな行動計画はあらかじめ決めておくことができた。昨年との変更点は出水市の農家訪問を断念したことである。昨年は最終日に出水市の農村宿泊体験を組み込んでよい経験としたが、今年は参加人数が少ないことから実施をあきらめた。

## 第2回：水俣に関する総合的学習(2)

〈6月25日〉

この日は4時間を使い、1回目の続き（水俣に関する学習）と、夏の実習の計画づくりを行った。まず昨年5月10日に放送されたNNNドキュメント'10「未来への診断書 水俣病と原田正純の50年」を視聴した。実習で実際に原田先生に会うことが決まっていたので、生徒は熱心にみていた。続いて『水俣病小史』を使って水俣病の歴史を簡単にふりかえった。今年を受講生には高校から入学した生徒が2名おり、中学校での水俣の学習を経験していないためポイントをおさえながら行った。

後半は、実習の準備を行った。まず生徒各人に水俣病で関心のあることがらについて発表させた。国の対応、チッソの労働者、医学の対応、差別、マスコミ、持続可能な開発などさまざまなものがあがった。しかし、この時点ではまだまだ深い問題意識は持っていなかった。そこで、新たな資料として、朝日新聞でちょうど連載がはじまった「ニッポン人脈記－水俣は問いかける」を配布した。このシリーズは一定の社会的な課題に関わった人々の人脈記である。記事に登場する人物の多くは故人となっているが、人のイメージを持つことができたと思われる。

## 第3～5回：実習準備〈7月中に3回〉

正規の授業時間とは別に3回ほど集まって8月のフィールドワークにむけた準備を行った。今回の実習のコーディネートをお願いした環不知火プランニングから訪問が可能な方々のリストが送られてきたので、それを検討しながら訪問先を決めて行った。決定した訪問先には質問票を送付した。中学校からの生徒は中学2年・3年でフィールドワークを行った経験があるので、実務的な面での不安は少なかった。

## 3 水俣実習報告（大野 新・宮崎大輔）

### 3.1 実習の概要

日程：2011年8月8日（月）～8月11日（木）

行き先：熊本県水俣市および熊本市

引率教員：大野 新・宮崎大輔

参加生徒：高校2年生6名（1名欠席）

引率2名

### 3.2 おもな行程

1日目午前 熊本空港經由空路水俣入り

午後 原田正純先生による水俣学講座

2日目午前 親水護岸、百間排水口見学

水俣病資料館見学

午後 班別フィールドワーク（1）

水俣市民に聴く（班行動）

①水俣病患者・家族の方々2名

②相思社

3日目午前 班別フィールドワーク（2）

水俣市民に聴く（班行動）

午後 チッソ水俣工場

4日目午前 熊本日日新聞社訪問

午後 熊本空港經由空路帰京

### 3.3 生徒が記録した実習報告

実際の実習内容については、生徒の報告書をもとに、おもな訪問先とそこでの聴き取り内容を紹介する。（昨年と同じ訪問先は割愛した。一部表現を修正した。）

1日目午後

#### 1) 水俣学講座 原田正純先生

於：熊本学園大学 水俣現地研修センター

プロフィール：熊本大学医学部を卒業し、水俣病と有機水銀中毒について患者とともに研究をつづけた。水俣病の最も近くで研究を続け、水俣病研究の第一人者。現在最も水俣病に関して詳しい人の一人である。

1960 東京にインターン中に水俣のビデオを見て、水俣に帰る

1961 初めて水俣に来る「なんて空と海のきれいな町なんだろう」

長い間、動物実験に使用する動物たち、ネコ、ネズミ、ウサギ、ニワトリ、ドジョウの世話をしながら原因解明に協力、患者側の視点にたったの研究を続ける。そのほか三池炭鉱に関する研究者でもある。

#### 1. 公害の原点

有史以来、人間は火を使い始めてから一酸化炭素中毒と、水銀を利用し始めたローマ時代からは水銀中毒とも向き合ってきた。しかし、環境汚染と食物連鎖を

経た中毒というのは人類史上初であり、ハンター・ラッセルの発表した労働者の中毒についての論文は世界的に注目された。「胎盤を毒物が通過した」ということが確認されたことも世界初であった。毒物は胎盤を通過しない、地球上に残る生物は子孫を生き残らせてきた。しかし有機水銀はその胎盤を通過してしまった。これはそれまでの常識からではありえないことであったため、ほとんどの医者は当初頑として認めようとしなかった。

## 2. 水俣病の歴史

水俣病発見のレポートは1956年5月1日に伝染病の疑いがあるとして保健所に提出された。これが公式に水俣病の発見の日とされている。「生きる人形の告発」と呼ばれる同じ症状の姉妹が二人で病院に運び込まれ、しかも同じような症状の患者が次々に運び込まれたためだ。しかし水俣湾を中心にアチコチに発病した伝染病だとしたら同心円上に段々と遠くに広がっていくはずなのにそうでなかったため、伝染病ではないということは専門家にはすぐに分かった。だがその情報は住民には正しく伝わらず、伝染病患者は近づくなと言われたり、口を抑えながら家の前を通り過ぎる村民たちに傷ついたりしたこともあった。

もともと日本は豊かな自然と四季があり、豊かな海が育まれる土地である。中でも美しい自然に囲まれた不知火海ではその豊かな自然の中で当時は魚と芋が常食であった。今ではデコポンと甘夏が特産となっているが、海産物もまだまだ多く捕れる。そのため村民が全体で感染した。水俣は豊かな海と共に生きる村であったのだ。漁師は自分たちが伝染病であると噂になって記者が来るとニュースになり、熊大の先生が来ると病氣と診断される。自分の体調がおかしいと分かっているにもかかわらず魚が売れなくなり、家族を養うことができなくなるので「記者はくるな 熊大の先生もくるな」という張り紙をするほどであった。さすがにおかしいと調査を始めたところ、ヘドロ、魚介から、また患者の髪や臓器からさらには狂ったネコの臓器から水銀が検出された。ネコに水銀を含む泥を与えてみた症状が町で発狂した猫の行動と一致したため、水銀中毒であることが分かった。

当然水銀の出所がどこであるかについての調査が始まったが、不知火海に水銀がたまっているということしか分からなかった。というのもチッソは水俣の看板であり誇りであったため、チッソの「自分たちは水銀など出してはいない」という言葉を疑うことすらしなかったからだ。

## 3. 胎児性水俣病

「兄は水俣病、弟は脳性麻痺」であるという母親がいた。水俣病は魚を食べて起きる病気なのだから、生まれつき症状が出ているなら水俣病ではないのではないかと、ということらしい。しかし母親は同じだけ食べた夫が死に、妊娠した私は大丈夫だったのだから「子供が毒をもらってくれた」からなのだ、と直感的に感じていた。しかし医者達は胎盤を毒は通過しないという常識や定説に捕らわれ、取り合わなかった。

原田さんはその意見を取り上げ、世紀の大発見となるのではないかと考え、患者を呼び出して診察を始めた。だが、診察に来るとその日の日当を受け取ることができない等患者から苦情を受け、自分が家をまわることになった。結果、このような状況下の患者の家を見て、どのような生活をしているかを目の当たりにして衝撃をうけることとなった。

湯堂をまわると小児10人、胎児7人が同じ症状に苦しんでいたが、胎盤を毒は通過しないという常識のため、水俣病だと証明ができなかった。

そこで同一症状なのだから同一原因であろう、という結論を出すに至った。水俣病の被害が疑われる胎児の全員に時期・地域が水俣病と一致すること、また家族に患者がいて母親が妊娠中に魚介類を多食、母親に軽い水俣病が見られるという共通項があることの発表をしようとしたが、村が騒然としている、時期が悪いなどの理由から取り下げられた。

それから「誰かが死ねば（それを解剖することで）原因が分かる」という噂がささやかれるようになっていた中、しばらくして患者の一人が死亡し、その体を解剖してみると胎児性の水銀中毒、胎盤を通過したと判明し、皮肉にもその酷いおわさは現実となってしまった。そして実験により、有機水銀が胎盤を通過して体に害を与えていたことが分かった。また、このときメチル水銀が海で拡散し、食物連鎖中に濃縮したということも分かった。

それを他の教授が発表すると原田さんも後を追うように発表した。

この発表をうけ、チッソは騒ぎになるのを恐れて見舞金3万円/年を患者に渡した。患者はこのことを報告に来たが「(年に)3万円もらえることになりました」といった患者に対して原田さんは「(月に)3万円か、よかったですね」と答えた。3万円は当時貧困のどん底にいた漁師には大金だったのだ。

その後現在に至るまで裁判を繰り返し、認定制度等状況は改善されているものの完全な解決には至っていない。

#### 4. 今後の課題

水俣病問題は終わっていない

##### ①実態の解明

原因—魚、原因物質—有機水銀

「たしかに魚が原因であろう、その何が原因か分からないから魚全てを禁止することはできない」というのが国の主張であったが、分からないからこそ全部禁止にするべきだった。エイズ事件とは血清の使用において治療エイズ患者の血液を使い感染した事件であったが、これも同じような理由で起こった。このような理論では食中毒なども防げず、目先の不利益ばかりに気を取られ、結果多くの人の命を奪ってしまうことになる。

無機水銀は心臓、消化管、胃腸、骨髄にたまるが胎盤を通過しないため人体に悪い影響は与えられない。それに対し有機水銀は子供の脳や神経、脊髄にたまり、胎盤を通過したため人体に悪い影響をおよぼしてしまった。

日本独自の風習として、へその緒を保管する、というものがある（他に台湾、フィリピン、マレーシア、インドネシアにもあるらしい）。保存してあるへその緒に水銀がたまるのでは？と考え、水銀値を調べたところ、非常に高い水銀値が測定された。もし有機水銀が胎盤を通過するかどうかで議論しているときにこのことに気づいていれば簡単に証明できたのに、と悔やんだらしい。「子宮は環境の縮図なのだ。だから環境汚染が汚染されれば子宮も汚染され、子供たちへとそのしわ寄せがいくのだ。」というのが原田先生の言である。

水俣では生態系に与える被害を軽視して干潟を埋め立てた。この時、微生物を食べる魚その魚を食べる魚そしてその魚を食べる魚……と連鎖していく。一見どうでも良い、いらぬ、どうせ大丈夫だと思うものが根本的なつながっているのではないか。

実態の解明にあたり研究チームがつくられた。タミヤ委員会という名で熊大を代表し厚生省の研究班として報告書を書くはずであったのに「大事件だから国家的なレベルで」大型の研究班に新たに「格上げ」することで解散させられてしまった。国家レベルでというのはおかしく、元に金を送るのが正しいのでは？

##### ②被害者救済

国は最高裁で責任を認めているが、はたして責任をとっているだろうか？手帳を渡して医療費は工面しているが、すでに50年もたったことで、対応が遅すぎる。

新潟でも同じような事件がおきた。昭和電工鹿瀬工場が排出した有機水銀が原因である。

川魚が原因だったため、海魚が原因であった水俣病よりは被害者は少なかった。

このときに県全体として妊娠規制をかけて胎児が生まれないようにおろしたが、一人だけ生まれた子供が水俣病らしき症状を出した。一人だけであったため普通に小児性麻痺患者が生まれる可能性もあるから胎児性か分からないため、熊本に連れてきて診断してみると、やはり胎児性水俣病であった。今でも言葉はできないがパソコンは使うことができる。

この事件では被害者の視点にたった迅速な対応がとられた。現地の人々の気持ちを考え専門知識を持たない人から見た専門家、事件全体に対する意見を考えるとこれは大事なことだ。原田先生も行政も世論も当時は妊娠制限という迅速な対応について評価した。しかし妊娠制限という対応は障害をもって生まれることは不幸だと決めつけてしまっていることになってしまう。障害者は生まれるな、ということではいけない。

水俣病を戦後すぐくらいに発病している人がいる可能性も高いが、細かい調査をしなかったせいではもう証明できない。また、朝鮮（満洲）にも同じ工場があったことから、そこでも同じ被害がある可能性もある。そういう人たちは今の制度では水俣病だと判断されることはない。また、被害者が被害者だと知らずに差別し、その後症状にさいなまれ、患者として病院に行く、とうこともままある。患者同士の感情的な問題もある。

食事制限がかけられた後も漁民が魚を食べることは止められなかった。貧乏で他に食べるものがないというのものもあるが遠いところ対岸などの話は入って来ず、情報もない流通も悪いということで危機感がなく話すら知らない人もいたほどであった。

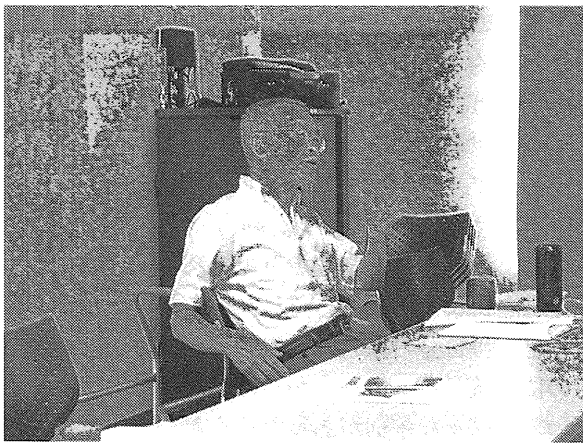
##### ③今後の課題 環境—福祉

アセトアルデヒドの生成中に有機水銀が生成されるということは専門家なら誰でも知っている。事実の使い方が重要であるということだ。それまでの常識、チッソへの憧れが事実の判明を遅くした。腐らせた魚のアミンや戦争で海に沈んだ不発弾が水俣病の原因であるとまことしやかにささやかれた時、専門家には全く証明されていない根も葉もない噂だということが分かるが、「東工大の教授が発表した」というだけでマスコミは事実として公表し、人々にはそういうものだと伝わってしまう。

最近の研究は分化が進みすぎていて専門の知識には詳しくなっても他が分からない研究者が多すぎる。当時研究者はあれだけニュースになればチッソが水銀の

排出をやめると、また患者は水俣病のことを理解していると思込んでいた。水俣病は思い込みや専門のこのみを考える研究者の性が被害を大きくしてしまった面もある。多くの研究者は知っていることだから調べない、という風に考えてしまうが、新たな視点が必要である。専門家は専門家で知識を集めつつ、他の面でまとめる人が必要なのだ。その両方は不可能である、自分の認識が全てではないという認識が重要である。なまじ社会との関わりがあるが故に誤解してしまうのが医者という職業だが、そういう風にたこつぽに入らず、全体を俯瞰することも重要である。

放射線についても完全に安全とは言えないまでも同じではないか。3月11日に起きた地震に関し、専門家が「放射能は海で薄まるから大丈夫」という発言をしたが、これは水俣から全く学んでいないと憤りを隠せない。たしかに1度は薄まるが食物連鎖を経て濃縮されてヒトに還ってくることは十分に考えられる。そういった水俣の教訓を全く無視した内容だったからだ。原田先生は40年前に書いた自分の本はまだ古くなったとは思わないという。水俣の本質はあまり変わっていないのかもしれない。(まとめ：小澤)



2日目午前

2) 案内者とともに水俣を歩く

1. 親水護岸

駅から国道3号線沿いの旧道を走り、しばらくすると、川を橋でわたる。

だが、ここは川ではなく、昔は海だった場所だ。この橋を渡った先は、ヘドロの埋め立て地となっている。橋から下を見下ろすと、エイなどの魚が泳いでいるのが見え、海水だということが分かる。

さて、埋め立て地に入ると、きれいに整備された公園になっている。しばらく走ると、右手に林が見えて

きた。奥の林は、昔からある陸地。一方、道を挟んで手前側は、ヘドロの埋め立て地だ。先ほどの橋から埋め立て地に入ったが、自転車で5分ほど走れば、かつての対岸についてしまった。とはいえ、埋め立て地は東西方向に長く広がっているため、面積は広い。



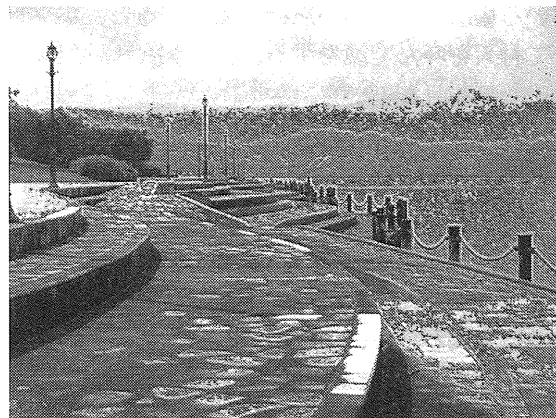
地面の下には、大量のヘドロが埋まっている。堤防を作った中にヘドロをいれ、厚さが1ミリくらいのゴムシートを被せてから、土で覆ったらしい。ただ、ゴムシートはもう破れてしまっているだろう。

埋め立てたばかりの頃は、30~40センチほど沈降したところもあったそうだが、今ではだいぶ安定している。巨大な建物などは建てられないだろうが、樹は至る所に植えられている。

さて、海辺に近づくと道路が途切れたので、自転車を降りて海岸に向かう。

自転車を降りた場所に立っていた看板には、水俣病犠牲者慰霊式(2006年)の写真が載っている。これから向かう慰霊碑の前で行われたそうだ。写真には、当時の水俣市長と環境庁長官(小池百合子)が写っている。

さて、海岸にやってきた。石畳のきれいな公園になっている。見渡すと半円状に波打つような海岸になっている。



この円状に波打つように整備された海岸は、下に巨大なドラム缶が埋まっていることをうかがわせる。汚染された海をきれいにする際、汚染されている魚を獲ってはミンチにして巨大ドラム缶に詰めた。そしてそのドラム缶を海岸に並べ、上を舗装して整備したのだった。自分が立っている場所の真下には、大量の魚が詰められていると思うと、複雑な思いになる。

また、案内者の吉永さん曰く、今日は珍しく潮がよく引いていて、海沿いの柵が全て海面から出ている。

初めてみた僕にとっては、この風景がいつものことだろうと思ってしまったのだが、どうやら本当は、石畳の部分海水に浸ってしまうらしい。その証拠に、海に近づくほど足下がジャリジャリと音を立てる。実はこれは砂利ではなく、小さなタマキビガイである。また、階段状になっている壁面には、フジツボが付着している。また、海をのぞくと、底まで見えるきれいな海だった。よく見ると小魚がたくさん泳いでいる。

ちなみに、最近ガンガゼ（ウニの一種）が大量発生して困ったらしいが、去年の冬に海水温の影響で激減したらしい。

底には大きめの石がごろごろと敷き詰められている。実はこれは埋め立ての際、人工的に置かれたものである。また、海岸沿いにしては海が深いのだが、これは、埋め立てする前は沖合だった場所だからだ。

かつて水銀で汚染されていた海とは思えないほどきれいで魚が豊かな海だが、水俣はもともと水が豊富な地域らしい。少し離れたところからは、真水が大量に湧いていて、この湧き水で水俣市民が暮らしているくらいの量らしいのだが、その水が海に流れ込むことで、どんどんきれいになっていくそうだ。

今日でも漁業が盛んで、沖合をみれば、たこ壺の目印となる旗が点々と浮かんでいる。

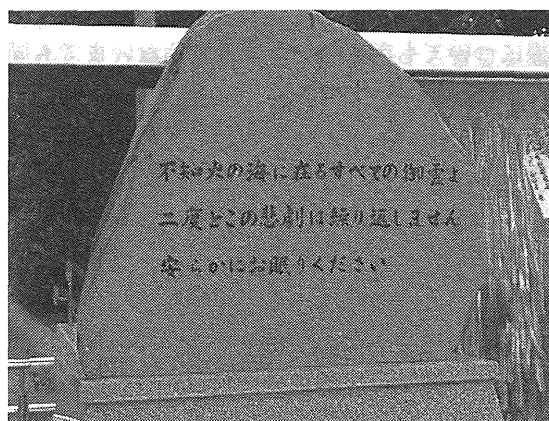
また、海面にはほところどころ黒くなっている箇所があるのだが、それはナブラと呼ばれ、魚がたくさん集まっている場所だ。漁師が魚群を見つけると、ホラ貝を吹いて村人を呼んで漁をする、という風景が、50年前にはよく見られたという。

このように、海に依存した生活が、水俣病発症の背景になっているともいえる。

さて、海の反対側に目を向けると、芝生の上にお地藏さんがたくさん並んでいる。だいたい50体くらいある。ただ、埋め立て地は県の土地であり、公的な場所であるにも関わらず、こういった宗教的なものを置くのは如何なものか、という指摘もあり、正式には「魂石」と呼ばれている。本願の会という団体が主催して

置いている。石ならば、少なくとも何十年か百年くらいは、そのままの姿で残っていける。すこしでも後世に人々の思いが残るように、魂石がつけられた。さて、先ほど看板の写真でみた慰霊碑の前にやってきた。左側に鐘があったので、鳴らして黙祷した。

水俣病は、坪谷という集落で生まれた5歳の子供がチッソ附属病院に運ばれ、初の公式確認となる。チッソは昭和7年から水銀を流し始め、実際には至る所で発生していたと考えられるが、公式確認の年を区切りとして、50年目にこの地に慰霊碑が建てられた。



この慰霊碑には認定されて亡くなった方々の名前が書いてあるのだが、その人数は350人ほどである。認定患者数が約1600人なのに、明らかに少ない。

なぜならば、遺族の人たちは複雑な思いを抱いていたからだ。慰霊碑に名前を刻むため、市の職員が遺族の家を訪ねて、許可をとろうとしたのだが、大部分は断られたそうだ。

やはり、水俣病は伝染病だと思われていた時期があり、それをいまだに頭から離れないのかもしれない。少なくとも、自分の家族が水俣病であったことを知られるのに抵抗がある人が多かったのだ。

かつては様々な差別があったそうだ。例えば、家を建てるときも、普通は自分の稼いだ給料で家を建てたことで、周りからは褒められるだろう。しかし、それがチッソからの補償金であるとわかると、人々は「仮病御殿」と呼んで馬鹿にしたのだった。そのような苦しみも、患者の家族はうけることになったそうだ。

慰霊碑の後ろには千羽鶴がかけられている。毎年地元の小学校をはじめとして、各地の団体が作ってくれるそうで、それはたいまつでお焚き上げしている。

また、石のまわりに粘土の焼き物が散りばめられているのだが、これは海外の方が置いていったものらしい。海の生き物の形をしている。

ところで、海岸からすぐそばに見える位置に、恋路

島という島が浮かんでいる。

水俣湾に仕切り網が敷かれた際には、この恋路島を囲むように設置されていた。

今では無人島だが、50年前にはこの島にも人が住んでいて、キャンプ場や海水浴場などもあった。島の人々はみんな魚を食べていた。

いまでは樹が生い茂る島になっているが、戦時中は樹が一本も生えていなく、全てが芋畑だった。

しかし、人間の暮らしがなくなって50年で、すっかり生活の面影がなくなり、森へと変わった。驚くべき自然の回復力である。

ちなみに、生えている木はタブで、この辺の地域でタブ林が見られるのは珍しいそうだ。

バブル景気の時代は、この島にホテルを作る計画もあったらしい。その際、本土と島を橋で結んでしまおうとしたのだ。しかし、吉永さん曰く、橋ができてしまうと、島としての魅力が減衰してしまう。ただの不便で遠い場所になるだけだ。

この島を見ていると、自然と人間の関わりを考えさせられた気がする。

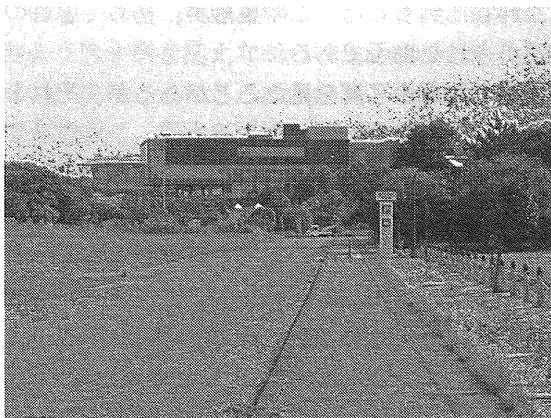
海岸には流木が流れ着いていた。しかし、誰も拾おうとはしない。けれども、東京にいけば、東急ハンズでは500円くらいで、木片が売られている。なんとも不思議な感覚になる。

さて、この埋め立て地をつくるのには485億円という大金がつき込まれた。吉永さんが一度に見たお金の最高額は54万円だそうだが、とてつもない金額だ。

それも、チッソがちゃんと水銀を処理していれば、かからなかったはずのお金であり、そして、失われなかったはずの命もある。この親水護岸を、命を考える場所にしてほしいと、吉永さんはおっしゃっていた。

## 2. 水俣病資料館

さて、先ほど自転車を置いた場所に戻り、道をまっすぐ進めば資料館に着く。



正確に言えば、「環境省水俣病情報センター」「熊本県環境センター」「水俣市立水俣病資料館」

の3つが立ち並んでいる。

内部は基本的に撮影禁止だったので、これから吉永さんが解説してくださったことをまとめていく。

まず、水俣湾沿いの集落でどれだけの患者が出たのかを、地図上に縦棒をたてて表した資料があった。現在、認定患者は2271名で、そのうち死亡した人が1600人ほどいる。しかし、これは実際の患者数とは大きく異なっている。なぜなら、さまざまな社会的な要素が絡まっているからである。まず、申請する際は「本人申請主義」という考え方があり、自分で申請しなければならない。そうすると、チッソの従業員などは、会社への遠慮から申請をしなくなってしまう。また、市場がある地域では、風評被害で魚が売れなくなることを恐れて、集落の人々の中で申請をしないように我慢し合う場合もあった。一方で、特に躊躇いもなく申請していく集落もあり、その地域の認定患者は非常に多い。

これらを踏まえると、単に認定患者が多いからといっても、それは純粋な患者数ではないのである。実際、水俣湾の魚は鹿児島県の錦江湾まで泳いだという記録もあるらしい。認定患者数には現れなくても、広範囲に被害が及んだことが窺える。

さて、資料館には水俣湾の劇症型の患者の写真が展示されている。しかし、患者の遺族が展示を断ってしまう場合も多いそうだ。個人のプライバシーに関わるので、難しい問題である。

また、チッソの製品を紹介するコーナーもあった。チッソが垂れ流した有機水銀はアセトアルデヒドの触媒であるのだが、これはビニールを柔らかくする工程で使われた。当時は、ゴムを石炭から作っていたそうだ。

こうしてチッソはなくてはならない企業となり、現在でも我々はチッソの恩恵を受けている。

例えば、液晶の原料は世界の50%以上のシェアを持っていて、肥料、化粧品、酒などの原料も製造している。

チッソというと殺人企業というイメージがついてしまっているが、水俣の人が受けている恩恵は大きく、市民の多くはその恩恵もみんなに知って欲しいと思っているらしい。最近ではチッソへの当たりも丸くなっているようだ。

さて、国立の資料館の方に移動してきた。こちらで



は毛髪水銀濃度の測定ができる。

驚いたことに、いまでは水俣の人よりも東京の人の方が水銀濃度が高いという。なぜならば、水俣の人は小魚を中心に食べるが、東京の人はマグロなどの大型の魚をよく食べるかららしい。

生態系のなかで水銀は濃縮されていくので、大型の魚の方が水銀濃度が高いことになる。魚は排泄性が小さいので蓄積してってしまうのだ。

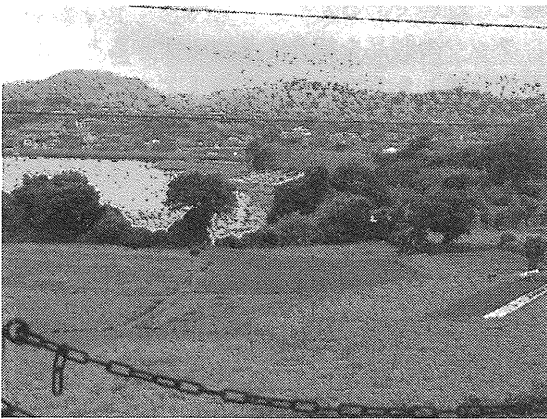
ただ、いずれも人体に影響があるレベルではなく、水俣の魚の水銀濃度は既に安全な水準にあることがわかった。

また、世界の水銀中毒に関する展示もあった。アマゾンや中国では、砂金から金をとるために、砂金と水銀を熱する人たちがいるそうだが、無機水銀が蒸発して川に溶け出し、メチル化して水俣病を引き起こす問題があった。また、カナダの製紙工場でも川に水銀が流され、先住民が水俣病になった。

いずれのケースでも、貧しい人が被害にあっている。貧しい人ほど自然に近い場所に住んでいるからである。

白人は水銀汚染された魚を食べることを先住民に禁止させ、代わりに生活補助を支給していた。しかし、仕事をする必要がなくなった先住民たちは酒ばかり飲むことになり、そのせいで白人からは墮落した生活として軽蔑されるようになった。

さらに、水俣病には酔っぱらいのようにふらつくという症状があり、それも一緒にたにされてますます差別や偏見が広がったそうだ。



資料館から水俣湾を見下ろした写真。実は5,6年前にダイオキシンの基準が変わり、海底の泥から基準値を超えるダイオキシンが検出されて問題になったことがある。しかし、その基準値というのは海の中で適用されるもので、陸上にあげてしまえば問題にならない。そこで、チツソは海底の泥をくみ上げて陸に埋める計画を立てたが、その場所が吉永さんの家の近くだった

そうだ。

そこで、吉永さんはチツソへ抗議したところ、チツソは、「焼き鳥だって、煙草だって、ダイオキシンぐらい出すのです」と言われたらしい。いまだに企業体質には疑問が残るようだ。

さて、資料館の屋上にはステンレスボールが108個並んでいる。犠牲者の魂や不知火海の漁り火をイメージしているらしい。

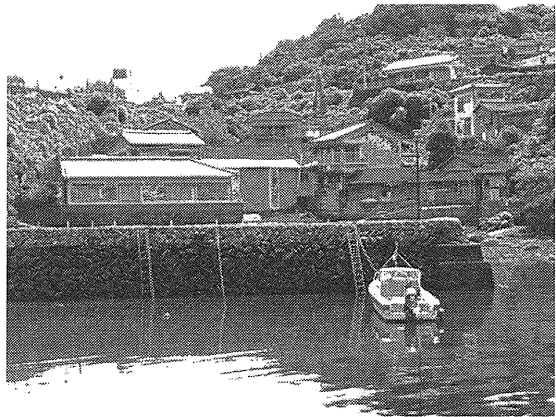
### 3. 坪谷

資料館を出て、埋め立て地を後にした。ちなみに、埋め立て地になる前はフェリー乗り場があった。しかし、フェリーのスクリューが水をかき回すときに沈殿していた水銀がかき回され、さらに拡散することになったと考えられている。

また、チツソがヘドロの沈殿している場所を掘り返したこともあるらしい。

それにも関わらず、何も知らない地元民は魚をいつも通り獲って食べていた。

確かに行政は書類で発表していたらしい。だが、地元住民がわかるような形にはなっていなかった。最近、飼料の糞を雨ざらしにして放射能汚染されたという事件も起きている。原発事故にも通じることがありそうだ。



さて、坪谷に到着した。この集落が、初めて患者の公式確認がされた場所である。

資料などで集落の写真を見たことがあるが、それとまさしく同じだったので驚いた。

当初は、近辺にある家畜屠殺場から細菌が感染したという説もあれば、旧日本軍爆薬説、アミン説なども発表された。特にアミン説は東工大教授が発表し、有機水銀説を圧倒していたのだが、捜査を遅らせる意図的な魂胆があると思われてならない。

そして初めての患者についてだが、この家は貧しく、タクシー代が払えないので、病院までの往復は線路を

歩いていったそうだ。また、遺影を撮るお金もないので、他人の孫の写真を勝手に借りて、それを仏壇に置いていたらしい。

しかし、後に水俣病の写真集が出版された際に、生きているはずの孫が、写真の中で仏壇に飾ってあるのを発見し、慰謝料を払わせる騒動に発展した。遺族が100万円払って決着したが、その100万円は結局相思社へ寄付された。(まとめ：平田)

## 2日目午後

### 3) 水俣市民に聞く

#### ①杉本実さん

##### 1. 基本情報

昭和41年、水俣市茂道にて、杉本雄、杉本栄子の五人兄弟の四男として生まれる。父、母、祖父母が認定患者で、亡くなっている。小学生のころから漁を手伝い、一度水俣を離れて就職するが、帰郷し、以来家業のイワシ漁を継ぎ、現在も一家の中心として漁業を営んでいる。親子3隻の船で行い、年間を通して操業している。親類と長男・肇氏と3人で、お笑いエンターテイメント「やうちブラザーズ」を結成。地域内外のイベント等に引っ張りだこで、水俣病患者家族としてではない、水俣の発信も行っている。

##### 2. 杉本さんの過去

一次訴訟や自主交渉などで水俣病問題が大きく揺れていた杉本さんの子ども時代、やはり差別は存在していた。水俣は差別「する」側と「される」側に二分され、患者や肉親に患者がいる者は容赦なく攻撃された。杉本さんもその真っ只中にいた。しかし、杉本さんは「される」側にいたのではない。むしろ「する」側に回っていたのだ。学校などで患者やその親類たちを差別した後、家に帰ってみれば患者である母が臥せている。そんな矛盾した生活を送ってきた。杉本さんは親からは水俣病については一切何も聞かされず、成長していく中でその実態を学んでいった。とはいえど、そのような矛盾を抱えながらの生活はつらかったに違いない。また、このころの水俣は、訴訟派と自主交渉派などで別れ、対立していたというが、杉本さんの周りではそのようなことは見られなかったらしい。そもそもどの家が何をやっているのかが、隣人のことでもわからなかったとのことで「ひとはひとで、うちはうち」と、水俣病関連での関わりはあまり強くなかった。

##### 3. チッソ、行政に対して

チッソに対しては、特に強い感情、求めるものといったことはないとする。杉本さんが水俣病について知

ったときは収束にむかいつつあり、それまでのチッソについてはあまりわからないからである。杉本さんは水俣病に関する活動によって交友関係を広げていった。ある意味、チッソのおかげで人とふれあい、話すようになれたとも語っていた。行政にはチッソと連携し、補償を続けてほしいとのことである。できないならできないでそれでいいから、その時は素直にそのことを伝えてほしいとも。これまであいまいな態度をとり続けていた行政には、やはり誠実な態度、対応が求められる。また、杉本さんは今回の震災における政府の対応についても言及した。被災地に対する補償金は、動き出しはたしかに早かった。しかし、質が悪く、そのおかげで保証金を受けられない人がいるとの考えを語った。

##### 4. 漁業について

水俣病の発覚後、行政は漁協と組み、魚をとらせないようにしていた。しかし、そのことについて一般の人は何も知らない。裏で金が動いていたのではないかと杉本さんは語る。漁師は魚をとらないと生きていけない。しかし、水俣産の魚と言って売ろうとしても、それだけで敬遠される。水銀の値を調べ安全なものを買っていたが、それでもほとんど売れなかった。水俣とは言わず、芦北（水俣のすぐ隣）産といえば売れるようになった。つまり水俣と水俣病が完全にイコールでつながっていたのである。仕切り網をして以降、徐々にだか売れるようになって言った。現在、漁師は減ってきている。どこの漁村でもそうなのであろうが、近代化が進むにつれて漁師離れが続いている。経験がものをいう世界であるから新しくなろうとする人も少ない。杉本さんも、始めたころは相当苦労したらしい。お父さんからは直接は教えてもらえず、見ようみまねでやってみて失敗し、また見ようみまねで挑戦する。そのようなことを繰り返しながらだんだんうまくいくようになった。今では魚をとって売るだけでなく、加工したものも売っている。私たちにもお土産にと一袋ずついりこをいただいた。

##### 5. やうちブラザーズについて

やうちブラザーズの活動は、気持ち的な逃げ道になっているという。観客の笑顔がみられるというのは、精神的にかなりプラスに働く。やうちブラザーズのきっかけは、とある宴会である。毎年11月15日に恵比寿祭りというものが執り行われ、代々網元である杉本家が一年間の収穫に感謝し、地元の漁師だけでなく山村の人たちも呼んで酒をふるまっていた。その宴会の席で長男の肇さんが踊ったのがきっかけでやうちブラ

ザースが始まった。現在では、8月に10本、9月に5本も祭りなどに呼ばれてステージに出演する熊本県のローカルスターである。

## 6. 杉本さんの哲学

たった数十年で水俣の海は美しく澄んだものに復活した。自然は自ら治癒することができるのだ。それを考えると、人間は「壊すだけの生き物」ではないだろうか。もっと自然に近づいた方がいい。道具もできるだけ自然なものにした方がいい。たとえば、ナイロンの漁網はとても長持ちし、便利である。しかし、それは魚のとりすぎをもたらす。実際、昔は藁で編んだロープなどを使用していた。それらは水につけるとすぐにダメになってしまうが、必要な分だけとり、何時間もかけて藁を干し、そして漁をするということを繰り返してきた。それこそまさに自然との共生であり、人間のめざすべき姿である。水俣病がなければ今の自分はいない。確かに、漁師として水俣病はマイナスである。しかし、それでも魚をうるのが自分の役目。おいしく、安全できれい。そのことに妥協はしない。会った人には食べてもらい、水俣の魚について知ってもらいたい。

(まとめ：赤木)



②永本賢二さん（昨年も訪問したので割愛）

③相思社—遠藤邦夫さん

### 1. 相思社とは

1974年に設立され、「水俣病患者および関係者の生活全般の問題について相談、解決にあずかるとともに、水俣病に関する調査研究ならびに普及啓発を行うことを目的」としている。国などの行政側やチッソとは違う第三者のような立場から、水俣病について研究していて、行政とは別に資料館（水俣病歴史考証館）を持っている。今回は相思社の職員である遠藤邦夫さんに話を伺った。

## 2. 水俣病の問題点

### (1) 食の規制の失敗

水俣市はいわゆる企業城下町であり、チッソという会社を中心に成り立っていた。そのために、チッソの従業員となる人も多かったが、一方で海に面しているということもあって、漁師も多かった。そのこともあってか、水俣の人々の食事では魚（タチウオやガラカブなど）が出るのがかなり多く、食生活で魚に依存する家も多かった。例えば、1961年の時点（水俣病の公式確認の5年後）であるのにもかかわらず、11ppmの魚を食べるような人もいた。これは、現時点の国が0.4ppm以上でそのうち水銀として0.3ppmを超えるものを暫定的規制値としていることから極めて高い数値であることは明らかであろう。ここで問題であるのは、危険であるはずの魚を食べることさらには魚をとることを徹底してやめさせられなかったことであり、その原因は、漁師は魚をとることで生計を立てていて、さらに水俣の人の食生活は魚に依存していることからである。

### (2) 『原因』と『原因物質』の差し替え

水俣病の公式確認は1956年の5月のことであり、1957年にはチッソ附属病院の細川一氏のネコ実験で水俣産魚介類の毒性が証明され、熊本県が食品衛生法の適用で販売禁止の方針を固めたが、国（厚生省）は「湾内魚介類のすべてが有毒化した明らかな証拠はなく、適用できない」と回答した。

遠藤さんは、ここで問題なのは「刺さった毒矢をまず抜くということをしなかった」と表現していた。これは、もし自分に毒が付着しているとわかっている矢が刺さったなら、まず先に矢を抜いて、その後毒の種類が何であるかを調べて、治療するという意味である。つまり、すでにネコ実験で水俣病の『原因』は水俣湾の魚であるということは証明されていたが、『原因物質』を特定できていないという理由で国は食品衛生法の適用を突っぱねたということだ。さらに、これ以前に浜名湖で貝を禁漁する前例があったという。そして、遠藤さんは、当時は高度経済成長期であり、チッソという会社が産業に必要なプラスチックや塩化ビニールの国内生産の約半分を占めていたために、国はチッソを擁護したと考えていた。

### (3) 患者数

1971年に逆転認定された川本さんは、患者は数千人いると主張したが、一方で原田さんは認定申請を出した人数が被害を受けた人数であるという考えから2万人はいると主張した。さらに、2004年の関西訴訟と

2009年の水俣病特措法の成立以降5万人以上になったという見方もある。この答えが出ない原因の一つは、『いつからいつまで』かに対して答えが無いことであると遠藤さんは考えていた。一応、環境省はメチル水銀の急激な倍加期が1953年頃(ピークは1961年)であることを根拠に1953年から1968年であると判断している。しかし、チソのアセトアルデヒドの生産は戦前から始まっていて、1953年よりも前から水俣病と思われるような症状をもつ人はいたという話もあり、完全な答えとはいえない。公式確認から50年以上経った今でさえ、未だに明確な患者数は出ていない。

#### (4) 胎児性患者

一時期、母親の髪の毛が50ppm以上あるいはへその緒が1ppm以上の胎児性患者の対象となっていたことがあった。この数値は、ホットハウスの激症者でさえ0.2から0.3ppmであり、実際にはあまりない数字であった。これは、コントロール調査(比較調査)をせず、激症者のみを調べてしまった結果だという。

#### (5) 汚染水

元々、チソ側は多少汚染していて、危険なものであったとしても、広大な海に流してしまえば、拡散してかなり薄まり、危険でなくなると考えていた。ところが、これは後に否定された。それは研究の結果、水俣付近の海域では潮の満ち干の関係で内海と外海の水があまり混ざらず、内海の汚染された水の多くが戻ってくるのがわかり、否定された。また、新潟水俣病の際にも汚染水は同じように抜けなかったらしい。

### 3. もやい直しとは

そもそも『もやい』とは漁業で網とロープを結んでいるもの、あるいは無償でやる共同作業を意味している。一方で、貰ったものをもらった形で返す『ゆい』という言葉もあった。

#### (1) 背景

水俣では、患者が差別されていた。もしある村から病人が出たら、その村の魚が規制されて売れなくなるから、患者に出て行けと言うような村ができていた。本来なら村の中で何か疫病が流行ってしまったなら、普通自分も感染しないように注意する一方で、患者のことを心配する。もし心配しないとしても、少なくとも差別することはないだろう。つまり、助け合いの精神・信頼関係が崩壊していた。

#### (2) 吉井元澄市長の登場

吉井元澄市長はこの助け合いの精神・信頼関係の崩壊を『内面社会の崩壊』と表現した。さらに、水俣病という今まで忘れたかったような問題を見直し、そ

して向き合い始めた。吉井元市長は救済もまだ済んでいない中で、地域振興を目指したのである。そして、遠藤さんはこれを水俣病の歴史の中の『進歩』であると考えていた。

#### (3) もやい直しの効果

遠藤さんは、資源ゴミの分別(最初は16種類、現在は24種類)をあげていた。今では他の自治体が、水俣市民は環境意識が高いと評価し、参考にしようと見学しに来るほどであるという。そして、他の市町村に環境意識が高いと評価されることによって、市民にも色々なことを考える精神的な思考における余裕が生まれた。つまり、人にとって褒められることは決して嫌なことではないから、さらに環境意識を高めることができるようになったということである。

しかし、遠藤さんは第三者的な立場から納得いかない部分があるという。まず、実際の環境意識が本当に高いのかということである。水俣では、ガスボンベをもえないゴミに入れて爆発するという事が2回あったという。さらに、水俣市の環境などの説明会で市側が、顔の利く地元出身の職員を派遣して容易に信頼を得ようとするということである。このあたりのことに対して市民が本気かどうか、遠藤さんは疑問に思っていた。(まとめ:松本)



遠藤さんから資料館で説明を聞く

#### 3日目午前

#### 3) 水俣市民に聞く

#### ④永野ユミさん

##### 1. 水俣で働くきっかけ

子ども時代を化学工場のある街で過ごす。朝日新聞に載った桑原史成の写真で水俣病を知る。

総合医療センターで医療ケースワーカーを務めた。昭和39(1964)年、先生が胎児性水俣病の調査をは

じめ、その付き添いとして初めて現地（水俣）へ。その日は天候が悪く、空がどんよりとしていたため、当初水俣について暗い街という印象が残った。昭和 29～31 年に生まれた胎児性水俣病の 10 歳以下の子供たちを見て「将来どうやって生きていくんだろう」と考えはじめ、「ほっとはうす」設立に至る。

水俣の小学校の校歌に「煙」という歌詞があった。水俣の住民がチッソを誇りに思っていたことが伺える。永野さんが水俣に行った時、胎児性の人には既にいて、漁師が漁をできなくなる状況というのはとても衝撃だったが、貧乏でも毅然として生きていた。（ただ多くの人が誤解しているであろうが、当時の写真のなかの家は今からしてみるとボロボロで貧乏さの象徴だと思ってしまうかもしれないが特別貧乏な訳ではなく、当時の漁村では普通レベルである。）

水俣病の子供を励ます会に入る。北星学園（北海道の遠くの学校）から高校生が訪れる。初の慰問が高校生であり、とても嬉しかったという。

## 2. 空白の 10 年

それまでは「予防」という第一の治療、「治療」という第二の治療という 2 つの治療しか存在せず、既に発症した水俣病に対して対症療法しか行えず、またそれにも有効な手段が見つからなかったため、水俣病には治療法がない“空白の 10 年”が存在した。そこで、第三の治療である「リハビリ」を導入し、「機能復帰、社会復帰、人間としての復権」を目指す治療をはじめた（昭和 38 年）。日本でのリハビリの導入は初めてで、公立病院、専門病院において水俣病患者のために始まった。水俣病には対症療法は存在しないため、リハビリによって体を動かし、症状の進行を抑えるしかないということも判明した。水俣としてはリハビリの場を提供することが唯一患者のためにできることであったため、湯ノ児にリハビリ病院が出来たから利用して欲しいと宣伝をしていたが、状況はあまりよくなかった。

### (1) 胎児性患者

「ウチの子だけなぜ様子がおかしいのか」と言って親が胎児性患者を連れてくると、病院には同様の症状の出ている患者が何人もいて、しかもどこの病院に行っても病名はわからないという状態が続いたが、胎盤を通過した有機水銀中毒だということが判明するとだんだん病院へ行くことになってきた。永野さんが湯ノ児に来たときに胎児性患者は 10 人位いたらしい。

ポリオなどといった病気も疑われていた。水俣病は個人差が激しく、40～50 代で 2 次障害がでて歩行という面でも加齢では片づけられない顕著な症状がでた

め、原田さんと国水研で研究を始めることとなった。永本賢二さんも目に見えて急激に歩行できなくなってきた。相談支援事業を各地域に作る法律ができ、水俣にももちろん導入された。水俣には相談員が 2 人きた。そこで保健所は福祉の分野からも同行させてくださいと申し出をして、患者の家周りに同行させてもらった。1600 人程の水俣病患者が亡くなり、300 人に 100 単位で健康被害がでた。

水俣病の患者数、患者名についてお聞きしたところ、そういったものは水俣市でなく熊本県が管理し、水俣市には細かいことは分からないという。永野さんは 1 年に 1,2 回患者の許可を得て様子を見に行くことしかできないようだ。

### (2) 検査の宣伝

水俣病の患者数を正確に確認できていないことの原因として、当時も現在も検査を受けている患者自体が少ないということもある。実際、水俣病患者の実態を知るために、現在でも新聞の広告など様々な場所で検査の宣伝をしているが、状況はあまり芳しくない。その理由として大きく以下の 2 つの理由があげられる。

### (3) 患者の心情

当時は自分がチッソに勤めているから申請したくても会社に逆らっているようではできない、あるいは孫の婿が従業員で、娘に「息子の地位に関係するといけなから申請するな」と言われてしまい申請できない、元チッソ従業員だから会社に悪い、など目に見えない心情で申請しない人も多かった。現在の患者の多くが両親を水俣病で失った方で、水俣病で苦しんでいたことを覚えている娘子にとって水俣病は封印してきた悲しい記憶であり、わざわざ検査に行つて認定されたくはないし、現在は遠くに引っ越している人も多く、周りは誰も知らないから分からない。また水俣にいる患者は過去自分たちを差別していた同世代の人達が自分と同じ水俣病の被害を受け、損得を考えて被害者手帳を受け取り、複雑な気持ちになった患者も多くいる。

### (4) 自覚症状

健康に見えていた人がある日突然歩けなくなる、というのも水俣病の症状の特徴のひとつであると述べたが、症状に個人差が大きく、外からは見えないしびれ、痛み、神経異常等の症状も多くみられ、しびれとか感覚障害はほかの人と違って分からないため自覚症状が小さいこともあり、一見しただけでは分からないことも多い。また昭和 40 年、働きに出る中で激症型を見ている人たちはあのような症状の出ない自分は「水俣病ではない」と思い込み、新聞のちいさな記事など

を見ても検査に行かない、あるいはそもそも気づかない人も多い。お金をあげる、などとすれば検査に行く人も多くなるのであろうが、そもそもその検査が水俣病患者を（これもおかしな言い方であるが）選定し、保険金を上げるかどうかの検査なのだからそういうわけにも行かず、効率は上がらない。

小児性だけ知らされず、水俣病であると気がつかなかった、あるいは胎児性だけ隠されていて患者申請が取り下げられ、50年経って初めて知ったなどという患者もいた。

### 3. 差別意識

被害者手帳には以下のものがある。

オレンジー被害者手帳、ブルーー健康被害手帳、黄色ー健康被害手帳、ただし水俣病でないと判明したら返却、認定された患者の手帳、司法認定の手帳。手帳だけでも5種類あり、差別の象徴となっている。熊本県で3万以上の被害者手帳が同じ病気で苦しんでいる患者のはずなのに病院での対応に違いがあれば不満が出るのもあたりまえだと思う。しかし水俣に、患者さんとは間違えられない年代がどんどん入ってきて、水俣病の患者が特別な人ではない、あるいは手帳が差別の対象ではないという意識も大きくなってきている。

これからの水俣は、水俣病があったからこんな街になってしまった。水俣病に対して何もしていないじゃないか、という両方の面を持つ。

水俣では都会に出ていく人も多く、過疎化が進み、高齢者の割合が50%を超える所もある。

「お城」チッソの責任と市民の責任とは別のもので、それぞれに果たすべき責任が存在する。チッソには地域貢献も求め、経済面で患者たちも含めた安心を求めている。住民の果たす責任、義務として差別やいじめの根絶がある。これは他の面でも言われていることだが、差別したほうは覚えてないけどされたほうは覚えている、ということはよくあることだ。ささいなことであっても気にする人は存在する。水俣全体で助け合うことが重要である。

永野さんに、水俣に町の外から来る人についてどのような感情を持っているかお聞きすると、昔は「支援者は去れ」チッソがないとダメだ、などという考え方もあったが、街の中の人では言いづらいこともはっきり言ってくれるので、街の中では変えられないこともかえられる。と、肯定的な感情を持っているようだった。水俣は余所のない街で、水俣病患者たちの代弁者たることが重要である。だが、水俣とチッソは運命共同体なのだから、チッソが移転しようとしていること

は許せないという。患者達と一緒にしっかり考えて街を良くして行く努力をしていくことが重要であり、水俣で共に生きる、ずっと背負う、ということを考えていかななくてはならない。行政もチッソも是非ほっとはうすに来て現在の水俣病について知って欲しい。チッソが応援してくれたら…と思ってもいたが、補償金以外に何かしてくれる気配もない。それでもまだ寄付くらいはできるはずだ、とチッソに関しては不満を隠せない様子だった。（まとめ：小澤）



もやい館で永野さんからお話をうかがう

### ⑤中村雄幸さん

#### 1. 経歴

新潟県生まれ。大学生の時に水俣を訪れ、70年代、当時の茂道の貧しさ・悲惨さを目の当たりにしたことをきっかけに、22歳の時に水俣に移住し、水俣病患者家族の行政に対する闘いを支えてきた。(財)水俣病センター相思社職員としても活動した後、不知火海におけるヘドロ処理工事差し止め訴訟に参加し、熊本県議会議員への抗議活動で暴力行為の冤罪で被告となるなど、多彩な活動を行ってきた。その後、相思社を辞め、1988年からは魚介類の車両販売を始めて現在に至っている。また、キャンプ場である「グリーンスポーツ水俣」の民間管理を担う「水俣自然学校」の活動も行っている。

#### 2. 魚介類の車両販売について

中村さんは相思社を辞め、1988年から現在に至るまで魚介類の車両販売を行ってきている。高校時代まで新潟の山間部という海とはかけ離れた環境ですごしたことから、逆に魚に対する強い思い入れを持っていたため、魚介類の車両販売を始めたという。また、相思社を辞めた理由としては、やりたいことが合わなか

ったこと、そして組織の中で生きていくより個人で働いた方が気が楽であると考えたことを挙げていた。それでは、水俣病は中村さんの魚介類の車両販売にどのような影響を与えたのだろうか。現在、不知火海には国が定めた基準（総水銀0.4ppm・メチル水銀0.3ppm）を超える魚介類はおらず、食べても水俣病を発症する恐れはない。しかし、水俣病のイメージが消費者に誤った認識を持たせ、水俣の魚介類を買うことを控えさせるといったことは想像に難くない。

中村さんに伺うと、「影響はほとんどない」そうである。水俣市内では9割方の人々が水俣でとれた魚を食べることに抵抗を感じていないという。ただ、影響を感じる場面もいくつか紹介していただいたので以下に挙げる。

- ・人吉市（熊本県の内陸部）などでは、産地が水俣であると聞いて買うのをためらわれたことがあった。
- ・普段是水俣産の魚介類を購入してくれるお得意さんのところに販売に行った時のこと。その場には別の主婦もいたのだが、その別の主婦がお得意さんに対して魚介類の産地を訪ねた際に、お得意さんは「芦北たい」と答え、産地を偽った。また、水俣の魚に関する調査として、北九州において、「水俣の魚はまだ食べられない」と思うかについての質問を行ったところ、「食べられない」と回答したのは

- ・水俣を訪れたことがない人：4割
- ・水俣を訪れたことがある人：1割

であったそうである。

以上のように依然として昔の印象で水俣は語られているのであり、時折それが中村さんの魚介類の販売にも現れてきているのである。

### 3. ヘドロ処理工事差し止め訴訟について

1970年代には不知火海・水俣湾にたまった、有機水銀によって汚染されたヘドロの処理は大きな課題となっていた。そこで県は、汚染されたヘドロを処理するために水俣湾の埋め立てを決定した。中村さんはこの埋め立て工事によってヘドロを処理することに反対する運動に参加していた。

反対の理由としては、

- ・埋め立てたヘドロの流出を防ぐ鉄板に50年という耐用年数が存在すること。
- ・地震による液状化や漏えいの危険性があること。

を挙げ、総合的に判断して現実的ではないとしていた。特に現在では東日本大震災を受けて、地震による液状

化の危険が注目されているそうである。しかし、裁判では負け、1977年から13年をかけて水俣湾の埋め立て工事が行われ、現在ではその上に運動場やバラ園などが建設されている。

ただ、判決には不満であるものの、反対派側から全面埋め立てに代わる案を出しきれていないのも事実であるとおっしゃっていた。土壌中の水銀を回収できる技術もあるそうなのだが費用面の問題があるという。しかし、鉄板の耐用年数のリミットは確実に近付いており現在は代案を検討しているところだそうである。

### 4. チッソについて

中村さんは上で記した「ヘドロ処理工事差し止め訴訟」に代表されるように、県を主とする行政を相手として見てきたため、チッソに対してはそれほど強い感情を持っているわけではないそうである。チッソについては「ひどい」企業、「下手な」企業であると表現していた。事件に対する対応や補償の仕方を見てそう思ったという。

ただ、チッソの植民地的支配（そしてそれは現在も続いているという）に対しては許せないと感じているそうである。具体的には、徹底的な対決姿勢と水俣市民の世論（チッソのおかげで水俣の雇用や経済が潤っているというもの）を味方につけ、水俣から撤退するぞという脅しをかけてくるやり方が気に食わないのだそうだ。

そして、チッソに対してはとにかく患者に対する補償を徹底することを望むとおっしゃっていた。視線はチッソ側というより患者側に向けられているようである。

### 5. 外部から水俣にやってきて

フィールドワークの1日目に吉永さんは、もともと水俣市民ではなく、よそからやってきた人に対して、住民の中には嫌悪感を抱いている人がいると言っていた。中村さんは70年代に水俣に移住してきたので、よそからやってきた人の一人であり、この嫌悪感の存在を感じることは確かにあるそうである。水俣病が発症した当時の水俣市民の中には、事件を大きなものにしたくないという意見を持つ者も多かったようで、中村さんのように外部からやってきた人々が水俣病を裁判沙汰にすることに加担していったことに対して、「大もめにしてくれたな」という考えは根強いそうである。また、「水俣病を食べ物にしている」といわれることもあるらしい。

しかし、外部からやってきたからこそ見えるものがあると中村さんは考えている。そして、まず解決すべきは外と内とのかい離をいかにして埋めていくかという問題であるとおっしゃっていた。ただ、このためにわざわざお互いに歩み寄る必要性はないという。お互いが自分にできる役割を果たしていく（例えば、外から来た者は外から来たものの視点で考え、もともと水俣に住んでいる者はもともと住んでいる視点で考えていく）ことで、自然とお互いを理解できるようになるのだと考えているそうである。

中村さんは現在、自分にできる役割として、子供たちに水俣の魚をさばかせるという体験学習を実施している。子供たちに不知火海のことを伝え、理論から入るのではなく実際に触れてもらうことで自信を持ってもらいたいという考えがあるそうだ。また、話は水俣からそれるが、東日本大震災で被災した方に対して何をすべきであるかということに関しても、まずは「自分でできること」という観点から考えるべきであるとおっしゃっていた。

## 6. もやい直しについて

水俣病を経て、様々な立場に分かれてしまった水俣市民を再び一つにしようというもやい直しだが、もやい直しは水俣にとっての「希望」である中村さんは述べていた。つまり、あくまで希望にすぎず、実際に実践するとなるとかなり厳しく、なかなか進んでいないのだそうだ。

水俣病が発生して、水俣市民は2つに分かれた。水俣病におけるチッソの責任を追及する側と、チッソを擁護する側である。水俣はチッソの企業城下町として発展してきたため、チッソを擁護する人々も多かった。患者やその家族に対する様々な差別も存在した。中には新聞の折り込みで水俣病患者を叩くといった迫害のケースもあったという。このような差別の対象となった人々はなかなかこれらの差別を許すことはできないだろうと中村さんはおっしゃっていた。

しかし、今の水俣に住む若い人々はだんだんとお互いに溶け込んできているため、対立のイメージが変わりつつあるところでもあるそうだ。

また、水俣市はもやい直しの一環という意味も込めて、環境都市を前面に押し出している。市全体で一致団結していこうという目的がある。そして現在、水俣は国の環境モデル都市に認定されている。しかし、このことに関して中村さんは苦言を呈していた。行政

と市民との間には意識の上での大きなギャップがあるという。実際、例えば旅館ではコストの面を優先し、合成洗剤をつかって排水しているといった例などもあるそうだ。行政は上（つまり国）ばかりを見ていて、環境都市を押し出すことによって国からの支給額が増えるということだけを考えている。行政は自分たちが納得できればそれでよく、市民の意識との間にかい離が生じてしまっているのだ。このような状況で、全国に対して水俣が環境都市であるということを押出ししていくことは恥ずかしいことであると中村さんはおっしゃっていた。（まとめ：後藤）

## ⑥緒方誠也さん

### 1. 経歴

1942年生まれ

中学校卒業後にチッソに入社

水俣市議会議員を長く務めて、議会議長なども務めた

### 2. チッソ入社前

緒方さんの通っていた中学校では畳の上をまっすぐ歩くというテストがあり、同級生の中にまっすぐ歩けず、患者と思われる人がいたという。一方で、チッソという会社は地元でも優良企業とされていて、22の枠に対して約300の応募があるほど就職先として人気があった。

### 3. チッソ入社後

緒方さんは2年程総務として、10年程生産・研究所で、30年程現場で働いた。

#### (1) 昭和32年

この年は水俣保健所長がネコ実験を始めて、湾の魚の毒性が証明された年であるが、緒方さんら労働者の多くは社内の壁新聞などの影響から工場の主張、つまりはチッソが水俣病の原因をつくっているわけではないと信じ、そして会社には勝ってほしいと思っていたそうだ。このとき、3500人もの労働者の中で本当のことを知っていたのはほんの一握りであって、アセトアルデヒドがどのような過程をたどっていくかは知らなかったらしい。また、緒方さん自身は漁業組合員や患者の座り込みに対してむしろ迷惑に感じていて、彼らの暴動から工場を守ろうと思うことさえあったという（緒方さんは今の東京電力の社員たちもそういった思いでは、と考えていた）。実際に、もし労働者の中に反対者がいたとしても、その反対者が弱そうであった場合にはチッソを強く信じるような組に入れ、逆に強そうであった場合には別の仕事をさせ、場合によっては



クビ切りや賃金の差別もあったという。ただし、チッソを訪問してチッソの方にこのあたりのことを伺うと、クビ切りや賃金の差別はなかったと主張していたことから、食い違いが生じていることが分かった。

#### (2) 昭和 37 年

4 月から 8 月の 133 日間チッソ内で安定賃金騒動が起き、これによって会社は二分化された。そして、会社に対抗する側の勢力である第一組合は会社の中でも『変なやつ』だと思われた。会社は第一組合員に対してはボーナスでも特償部分をほとんど付けなかった。このために組合内では皆で特償部分を集めて皆で分配した。緒方さんはこの頃から会社に対する意識が変わってきたとのことだった。

#### (3) 昭和 38 年

安定賃金騒動で変わり始めた意識がこの頃から 6 年間会社との戦いへと繋がっていった。そもそも、『労働者を人と思うな』の精神と『物を早く作ること』を重視する体質が上層部に根付いていたという。そしてこの体質は 1906 年にチッソが創業され、第二次大戦頃に朝鮮へと進出して行ったときから根付いていたものだったらしい。

#### (4) 昭和 43 年

この年の 8 月に労働組合定期大会で『恥宣言』が決議された。これは、組合がこれまで何もしてこなかったことを『恥』と思い、水俣病と向き合っていこうという思いで決議されたものである。恥宣言の後、第一組合の人々は会社にどんどん物言いするようになり、会社側に同水準の労働条件と水俣病の完全解決の二つを求めていくようになった。第一組合員たちの行動は市などが支援を決めると協力し、チッソの第一銀行であった工業銀行への押しかけに参加するほど積極的になった。また第一次訴訟では、組合員がアセトアルデヒドの製造でできたものを 1 日 1 回そのまま流していたことなどの職場の環境を証言し、さらに組合内でストライキやカンパに参加して仕事終了後に水銀調査の研究室を使って研究もしていたという（例えば、財団から提供された放射能を使うような高性能な機器を使用したり、たけのこ塾という医学のことを学ぶ塾を作り、原田正純先生らから教わったりしていた）。

#### (5) 昭和 45 年

この年に、チッソの千葉移転に関して合理化闘争が起こった。チッソが、水俣という土地に縛られていては会社が発展していけないと考えていた一方で、第一組合員や水俣市民はチッソを逃がさないように闘った。というのも、第一組合員や水俣市民はチッソを水俣の

土地で発展させ、そして支援させようと考えていたからである。また、環境破壊が問題であるということ的前提として、患者の切り捨ては絶対に許さないという姿勢を貫いた。

#### 4. 水俣市の取り組み

##### (1) 環境モデル都市構想

これは今取り組み始めている部分であり、例えば、ゴミの分別収集や産業廃棄物処分場の建設にも反対するなどの活動をしている。この結果、13 の NGO 団体が主催する環境都市コンテスト（2001 年から始まる）でも、2004 年に初めて選ばれて以来、合計で 6 回総合 1 位に選ばれている。さらに 2011 年には 4 つの条件を満たして『環境首都』に選ばれた（11 回のコンテストの中で始めて）。

ちなみに、環境首都の四つの条件とは、

- ① 総合で第 1 位であること
- ② 総合点が満点の 70%以上であること
- ③ 15 項目中、3 項目以上が満点の 90%以上の点数を得ていること
- ④ 15 項目中、満点の 50%以下の点数の項目が 3 項目以下であること

（『環境首都創造 NGO 全国ネットワークのページから引用）である。

今、水俣市では水俣にしかない『ONLY ONE』の部分である『命を大切にする』都市を目指しているという。

#### 5. 環境都市への反応

環境で飯は食えない（直接お金は入ってこない）が、エコ産業・エコ技術の開発から利益は生まれるから市民にも利益がある。そして、分別の協力などから市民もある程度評価されていると緒方さんは考えていた。

#### 6. チッソのあり方

市民が雇用のあることと患者の保障の観点からチッソを逃がしたくないと思っていること、そして企業は行政に対して介入するべきでないこと（一時期チッソ系の議員が水俣市議会の過半数を占めていたことがあった）を認識することが重要であると緒方さんは考えていた。

#### 7. 水俣病から

先の産業廃棄物処理場の建設反対から、市民の環境意識を感じるとおっしゃっていた。一方で、一部の市民は『水俣病』、『水俣市』という名前を変えたいと考えているらしい。例えば、九州新幹線には『新水俣』という駅があるが、この駅名が争点となった

り、隣にある芦北町と合併して芦北市あるいは新水俣市になろうという意見があったりと、今でも水俣＝水俣病のイメージを何とかしたいというような思いを持つ人もいるらしい。しかし、実際には水俣という名前を守りたいという思いも強く、名前を変えたくないという意見のほうが多いとのことだ。

また、教育に関して言えば、市の教育委員会が作った『水俣病のしおり』を基にして、学校ごとに教育しているとのことだ。(まとめ：後藤)

### 3日目午後

#### 4) チッソ(JNC)水俣工場見学

##### 1. チッソの概要

JNC株式会社は2011年、チッソ株式会社の事業のうち水俣病の補償事業以外の全ての生産事業の委託を受け設立された。現在、水俣病の補償のみを担っているチッソ株式会社はJNCの子会社として存在している。なお、JNCとはJapan New Chissoの略である。

##### 2. チッソの歴史

チッソの創業者、野口遵(したがう)は南九州における電力開発を目指し、1906年に鹿児島県に曾木発電所を建設し、(株)曾木電気を設立した。その余剰電力を活用したいと考えていた曾木電気に対して、水俣市は積極的に工場を誘致し、1908年に水俣に工場を造りカーバイド製造を開始した。当時の村民の中には平和な村が大騒ぎになってしまったと怒るものもいたが、多くの村民は人口が増加して町が潤ったと喜んでいて。その後、(株)日本窒素肥料と社名を改称し昭和初期に業績を大きく伸ばしていった。1932年にはのちに水俣病を引き起こすこととなるアセトアルデヒドの製造を開始、戦後に海外工場を失うも水俣工場の生産量は増加していった。

1950年代ごろから水俣病が社会的な問題になっていく。

1960年代の初期には労働争議が勃発し、労働組合が2つに分かれた。一方は水俣病についてより積極的に関与すること、そして賃上げを要求し、もう一方は会社側に立った。この2つの間に給料の差などは生じておらず、有給に差があった程度である。また、現在は労働組合は1つだけである。

##### 3. 現在の水俣工場と水俣

###### (1) 雇用

JNC水俣工場は以下の2種類の採用枠を設けている。

・一般枠…全国に対して募集を行っており、定められた合格ラインを満たす人を採用する。

・現地採用…水俣市の高卒者のみを対象として募集している。一般枠に比べて合格ラインはずっと低く、よっぽど大きな問題がない限り採用する。

現地採用によって、JNCは水俣市に対して地域の雇用を潤すという役割を果たしている。

###### (2) 水俣病に対する発言

水俣病が裁判で一応の解決を遂げるまでは水俣病の話題についてチッソとして発言することはタブーとされてきた。しかし、現在はタブーではなくなっていて、水俣病について発言することができるようになっていく。だが、積極的に発言することはしていない。このことに関しては批判されることも多いが、別に水俣病を特別に意識してはおらず、逆に過度に発信しすぎることで自己主張が強くなりすぎてしまうことを避けている。また、水俣病の認定を受けている人と受けていない人がいる中で患者に対し謝罪することも複雑な問題であり謝罪には至っていない。

###### (3) 従業員に対する教育

従業員全員が水俣病に関する教育を受け、知識・情報を持っているようなシステムになっている。例えば、新入社員に対しては2時間を費やして水俣病に関する講義を行うことになっているし、水俣病関連の新聞記事がある場合は全従業員に対して配信される。また、幹部の中の誰かが明水園やほっとはうすなどの水俣病関連の施設を訪れた際は、そこでのことを全幹部に伝え、共有している。

###### (4) 地域に対する貢献

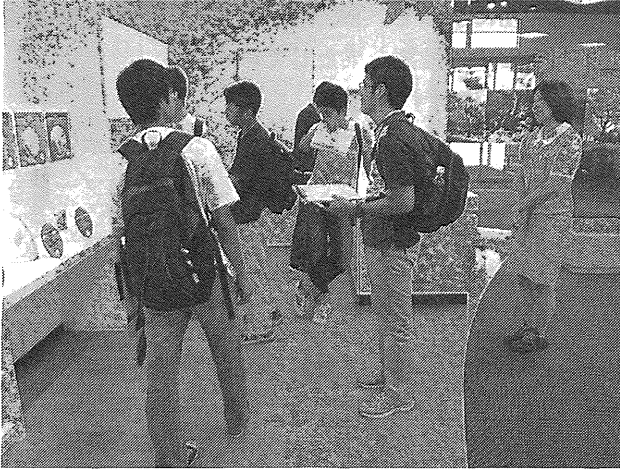
地域行事への参加、施設の提供、地域の清掃・美化活動などのボランティア活動を積極的に行っている。しかしメディアはこういったJNCのプラスの面を報道せず、水俣病関連のマイナスの面しか報道しないため企業のイメージがなかなか変わっていかないのが現状であり不満を抱いている。

###### 4. 水俣のいま

現在は化学メーカーとして液晶材料では世界シェアの50%以上を占め、国内のほとんどの肥料を生産するなど業績を伸ばしている。しかし、液晶材料などは他の製品メーカーに提供される形なので直接企業名が世間に触れることは少ない。環境保全に対する取り組みも積極的であり、工場排水に対し厳しい基準を設けたり、し尿処理を行ったりしている。現在は新規事業と

してリチウムイオン電池を掲げている。

また、現在の従業員の中には水俣病患者の手帳を持っている人（すなわち国から水俣病患者として認定されている人）もいる。（まとめ：後藤）



4日目午前

#### 5) 熊本日日新聞訪問（高峰武さん）

熊本日日新聞社の論説委員長である高峰武さんにお会いする機会を頂き、地元の新聞社から見た水俣病についてお話を伺った。

また、新聞社の内部も見学させて頂いたが、まずは話してもらったことから、順にまとめていくことにする。

#### 1. 熊本日日新聞とは

熊本日日新聞（以下熊日）は、昭和 17 年に創刊された。昭和 16 年には太平洋戦争が始まっているが、戦時統制によって新聞は一県一種類と決められた。新聞はもともと政党の機関紙であったこともあり、情報の統制のためであった。

もともと熊本県内にはいくつかの地方新聞社があったが、統合され、熊日が誕生した。全国的にみても、同じ時期に創刊された地方紙は多いそうである。現在では、朝刊 34 万部、夕刊 8 万部を発行し、熊本県内では 7 割のシェアを持っている。これまで力を入れて扱ってきた話題では、「免田事件」や「川辺川ダム」、「ハンセン病」などがある。免田事件とは、熊本県人吉市で起きた殺人事件が冤罪となり、再審無罪が決定した事件のこと。また、川辺川ダムとは、球磨川に建設が予定されていたダムのことだが、近年になって建設の中止が決まった。そして、ハンセン病は、らい菌による感染症のことだが、施設への強制隔離が問題と

なって、一連の政策は違憲であるとの判決が熊本地裁で下された。

#### 2. 水俣病の報道

##### (1) 初期の報道

初めて水俣病の記事がでたのは、昭和 29 年 8 月 1 日である。ただ、見出しは「猫てんかんで全滅」とあり、ねずみが激増して困るという内容だった。猫は魚ばかり食べるので、人間よりも早く症状がでたようである。

しかし、その紙面は社会面の中に埋もれていてさほど重要性は感じさせず、当時はあまり意識がなされていなかったようである。ただ、水俣病の研究が進んだ現在から見れば、この記事の中には様々なヒントが隠されているのがわかるという。

その後、昭和 31 年 5 月 1 日に公式確認がなされるまでは、水俣病に関する記事はいっさい無い。高峰さんは、一つのテーマを持続して報道することが大切だと実感したようだ。

##### (2) 公式確認後の報道

さて、チッソ付属病院の細川一医師の報告により、水俣病が公式確認された。その後の研究により、チッソの工場排水が原因だということが次第に明らかになってきた。だが、市民の反応は意外にも、チッソを擁護するものだった。

昭和 34 年 11 月 8 日の報道では、「水俣工場廃水停止は困る」とあり、廃水の停止をすれば工場も停止してしまい、水俣市民の多くが害を受けるとのことで、市民団体が知事に陳情をしているのだった。

ただし、この陳情には漁民は参加していない。少数派である彼らは、もちろん廃水の停止を求めているが、その意見は反映されなかった。

多数派の人たちは、豊かで、強く、きれいな社会を作ろうとしているが、一方で少数派は淘汰されていってしまう。このことは、ハンセン病でも言えることである。

さらには、現代にも続くゆがんだ構造にも当てはまりそうだ。東京では電車がひっきりなしにくる一方で、地方ではバスが 1 日数本しか走っていない場所もある。東京の豊かさは我々には当たり前のように感じているけれども、実は地方の貧しさが支えているのである。

##### (3) 原因の究明

昭和 38 年 2 月 17 日の記事では、熊本大学研究班が、水俣工場での製造中に有機水銀が生成されることを突き止めたとある。だが、一方で行政の反応は鈍かった。もともとあまり水俣病に対してやる気が無かったよう

だ。

しかし、実は昭和34年10月6日の時点で、ネコ実験を行っていた細川医師は、「ネコ400号」と呼ばれるネコが、工場の排水で水俣病を発症し、因果関係を究明していた。けれども、チッソ内部の隠蔽によって、この事実は隠されていた。昭和40年、水俣病一次訴訟にて細川医師がネコ400号の証言をして患者側勝訴の決め手となるまで、秘密にされていた。

#### (4) ニセ患者発言

昭和50年8月8日の記事によれば、補償金が目当てのニセ患者が増えているとある。これは、チッソを擁護する市民が、補償金を手に入れた患者への妬みから始まったようだが、新聞記事によれば、県議会議員が環境庁にニセ患者発言をしたとある。これが後に訴訟問題に発展した。患者達が熊本県を訴えたのだ。

背景を説明すると、県職員の発言は無かったことにしてくれ、と県の人々が熊日に頼んできたらしいのだが、それを押し切って新聞記事にした。すると、県は、熊日の報道は誤報であると主張し、訴訟問題に発展したそうだ。

というわけで、この訴訟にあたって、熊日は新聞社としては珍しく、補助参加することになった。報道の真実を立証するためであったが、地元紙の役割として、水俣病解決に貢献するという立場をとったからであった。

#### (5) 行政の対応

平成元年になって、WHOの関連機関であるIPCS（国際化学物質安全性計画）の提案によって、有機水銀の国際基準を厳しくする動きがおきた。それに対して環境庁は、反論するための委員会を設置した。なぜなら、基準が厳しくなってしまうと、補償金の対応や埋め立て地の対応が増えてしまい、行政への負担が増えると考えたためである。本来環境を守るための環境庁なのに、なぜ環境を守ろうとしないのか、という疑問があるが、それについて訪ねた記者が軟禁されるということもあったらしい。

#### (6) 認定基準について

水俣病から得られる教訓の一つとして、どこに基準をおくのか、という問題が挙げられる。

そもそも、水俣病は普通の病気とは異なり、認定が必要だった。国とチッソが連携して、目の前の紛争を解決させようとしたからである。

しかも、水銀の人体への影響が十分になされていない状態での基準であって、さらにはその認定基準がずっと変わらなかったことに問題がある。多くの人々がその認定基準を受け入れたなかで、大阪の団体が政府解

決を拒否し、関西訴訟が行われた。これは最高裁までいって、結局別の認定基準が作られる結果となった。

これまでの特措法は、水俣病の認定基準は変えないが、救済はするというものだった。特措法下では、患者ではなく被害者と呼ばれる。

そう考えると、関西訴訟の判決は画期的なものだった。とにかく、水俣病発生初期にしっかりとした調査や対策をとらなかったことが現在まで大きな問題になっているといえる。

#### (7) チッソ分社化

いまでは道路や鉄道が整備され、水俣への交通の便も良くなったが、昔は三太郎峠などの山越えをしなければならず、辺境だった。集落によっては船で移動したほうがよい場所もある。

しかし、チッソは高度経済成長を担ってきただけであり、中央とのつながりは強い。東大応用化学科主席は決まってチッソに就職したらしい。

このように、チッソは僻地にありながらも、東京とは強力につながっていた。

チッソ県債といった救済措置も、チッソを守るためである。国は、責任は認めたくなかったが、チッソは守りたかった。そのため、補償金が支払い能力を越えてしまったのを助けるために、県債発行に乗り出した。チッソは、もう患者の補償はやめて、普通の会社になりたいというのが悲願だった。補償金を支払い続けている限り、様々な制約が付きまとう。たとえば、業務提携をする際は会社の資産を明らかにするのが必要になるが、補償金をどれだけ払うか分からないので、つまり資産が分からないことになる。そのため、提携や合併ができない。こうした問題を抱え、チッソはいち早く水俣病から外れたいと思っていた。

そこでできたのが、分社化の特措法であった。もちろん文句をいう人もいるだろうが、“しかけ”をたくさん作って、分社化を成し遂げてしまったのだった。

#### (8) 地方と中央の新聞社の違い

水俣病を報道するということは、つまり水俣病のことをどう捉えるかということでもある。この点において、地方と中央での見解の違いが伺える。例えば、チッソを業務上過失致死で訴えようという動きが始まった。つまり、刑事事件にしようとしたのだ。しかし、患者が死亡した日から計算すると、時効がきていた。しかし、胎児が最後に死亡した日から計算すると、まだ時効がきていないことがわかった。

だが、ここで、胎児は人なのかという問題に突き当たった。結果的に胎児の死が認められて起訴できた。

これについて、全国紙は画期的な起訴として記事に取り上げた。一方で、熊日は遅すぎた起訴として、いままで起訴しなかったことを問題視した。これは一例であるが、熊日は、現場に近いことを活かして、地元の目線で書いていることがわかった。

また、全国紙の新聞社は転勤があるのに対して、地方紙の場合は、一つの物事を長期的に取材し続けることができるというメリットもある。

#### (9) 風評被害

水俣病が伝染病だと勘違いされたことにより、水俣周辺での海産物が売れなくなるといった問題がおきたことについて、マスコミはどのような影響を与えたのだろうか。

記事においては、「中毒ではない」と報道したものの、「伝染病ではない」とは書かなかった。確かに間違っていないが、誤解を誘ったともいえる。このように、書き方の問題で受け手の印象が大きく変わることもある。しかし、水俣病発見当初は、新聞をそこまで読んでいた人が多くなかったので、新聞がどれだけ影響を与えたのかについては、実際よくわからない。当時は口コミという口口伝えでの噂話が多かっただろうから、どんどんと誇張されて広まっていったことも想像できる。

#### (10) 患者への差別

部落問題などで、「寝た子は起こすな」という論があるが、つまり知らない人には最初から教えないよという考え方である。一見善に見えるが、知らなければよという問題ではない。水俣病の場合でも、差別は過去のものとして忘れてしまってはならない。

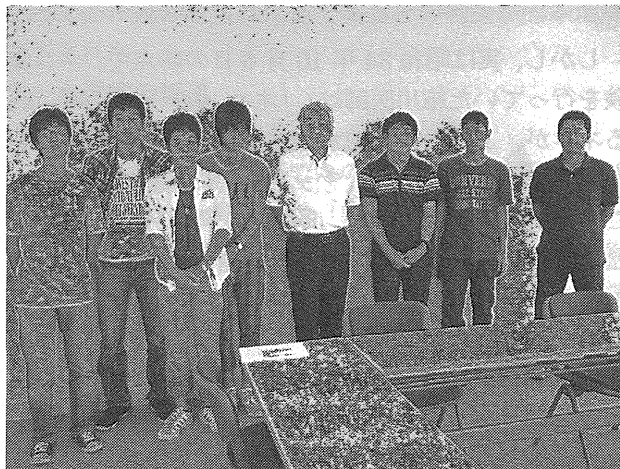
さらには、かつて患者を差別した人でも、年をとるにすれて手足のしびれなどの症状がでていた人もいた。つまり、差別していた人も実は被害者だったのだ。

#### (11) 熊日と水俣病

新聞とは、締切までの真実を述べたものであり、それが本当の真実とどれだけ近いのかはわからない。水俣病はいままで何度も終わったことにされてきたが、問題の全貌が明らかになっていかなかっただけに、見ようとしなくなった途端に見えなくなってしまうような問題だった。

確かに、県民の関心が特別高い内容である訳ではない。しかし、一つの物事について、持続して報道し、検証して真実に近づけていくことが大切なことである。

(まとめ：平田)



## 4 実習を終えて

### 4.1 実習後のゼミ

第6～8回：水俣実習のまとめ〈9月10日〉  
〈10月15日〉〈11月12日〉

実習で得られた成果は3回のゼミの時間を使ってまとめていった。フィールドワークは記憶が薄れないうちにまとめることが肝要だが、なかなか作業は進まなかった。また、聞き取った内容を検討することも十分にできなかった。この部分については今後の課題として残った。

第9回：経験の共有—ゼミナールオープン  
〈1月14日〉

実習の体験を報告する場として、今年度はゼミナールオープンの機会を利用した。これは、SSH（スーパーサイエンスハイスクール）事業の一環として位置づけられているものである。ゼミナールを中学3年と高校1年生に公開し、将来の展望をもたせようというものである。昨年のゼミナールオープンでは、受講生が次の段階で取り組む卒業研究の構想発表を行ったが、準備が不十分でかなり内容的に不満なものとなってしまった。そこで、今年度は夏の実習報告を行うこととした。最大で50名以上の中3・高1が報告を聞いてくれた。訪問先一件あたり10分程度でコンパクトに発表した。自らが得た経験を発信することで、さらに内容が充実することが期待できる。それらをふまえて今年も報告書づくりに取り組んでいる。

第10回：卒業研究構想発表  
〈1月28日〉

高3で取り組む卒業研究の個人テーマについて報告する予定。

ちなみに昨年度の受講生は、高校3年となり、卒業研究に取り組んだ。そのテーマをいくつか列記してみ

ると、水俣病事件の解決／カナダ水銀事件について／「客観報道」について／ボパールと水俣／環境都市水俣を考える／日本の電力事情／科学哲学／水俣病特別措置法と基本合意について／「水俣」からメディアを考える／チッソ水俣病関西訴訟について等々である。提出された研究論文を読むと、生徒の問題関心が広がると同時に深まっていることがわかった。

## 5 まとめと今後の展望

今回の参加生徒の感想を以下に示す。

「私が実際に水俣の地を踏むまでは水俣という地について、魑魅魍魎がうごめくような、どこか異様な空気の支配する場所というイメージを持っていた。しかし、駅から降り立ってみれば何のことはない、どこにでもありそうな田舎であった。そこからはマイナスの要素はまるで見当たらない。おいしい空気が流れ、普通に人が歩き、普通に自動車が通り、普通に路面電車が走る。水俣病など存在しなかったかのように時が流れていた。水俣病事件について何も知らない人が来ても、何も知らないまま終わりそうな、「普通」という言葉がしっくりくるような町だった。しかし、一見何の変哲もない現在の水俣でも、歩き回り目を凝らせばやはり事件の爪痕が見えてくる。親水護岸はまさにその一つだ。海沿いの波打つような曲線美は、巨大なドラム缶が埋まっていることをうかがわせる。そのドラム缶には汚染された魚がミンチにされ詰め込まれている。犠牲者となった彼らの目の前を、美しさを取り戻した透明な海が波打つ。

水俣市が高らかに謳う「環境都市」もそれに当てはまる。実際に水俣で会ったある方は、「住民はついていけない。行政は上ばかり見ている。もっと下も見してほしい」と語った。金のとれる「環境」という言葉を連呼する市と水俣民の差は、今も埋まっていない。

私が水俣を訪れる前の水俣病に関する知識は、教科書というフィルターにより濾過された、略史をさらに略したようなものだけであった。しかし、水俣の空気を吸い、水俣の地を歩き、水俣の人と出会う中で、今まで知ることのできなかった、知らなくてはならないことに触れることができた。敗戦後、日本が復活しようとする中で水俣は犠牲となり、東京は豊かになった。そして今も苦しんでいる人がたくさんいるということを肌で実感した。

魑魅魍魎は地面の下に埋められた。しかしまだうごめいている。埋められなくてはならないものはいまだ

埋められていない。水俣病事件は終わってはいないのだ。それを私はこのフィールドワークで痛感した。解決するときは一生涯来ないのかもしれない。だがそれでもあらゆる苦しみを抱えながら活動する方は大勢いる。大切なことは、この事件を注視していくことだと私は思った。」

第2次のSSHで5年間にわたって、「科学者の社会的責任を考える」授業づくりを目ざしてきた。とくにここ4年間は、教室での授業につながるフィールドワークを広島・水俣で実施し、その効果をたしかめることができた。講義式の一斉授業をはるかに上回る成果をフィールドワークはあげているといえる。

直接担当した2年間の水俣実習をふりかえって、具体的な課題をあげてみると、

- ・実習が夏であるため、事前学習の時間が短く問題意識を高めないうまま訪問先を設定している場合がある。
- ・事後のまとめに時間をとられている。聞き取った内容の相互検討が充分に行われていない。
- ・実習をふまえた事後のゼミ学習が深まっていないなどである。

一方、昨年3月11日の東日本大震災によってこれまで以上に科学的リテラシー育成の重要性を認識することができた。広島や水俣で得られた知見が今回の震災を考える上で非常に有効であることが確認できた。

理数系科目中心のSSH事業ではあるが、社会科学分野に関心を持つ生徒にまで範囲を拡大することによって、生徒の科学的リテラシー能力を大いに高めることができた。

来年度以降、機会がえられたならば、反省をふまえた新たな授業の展開を考えていきたい。